発行日：2019年2月
発行者：群馬県企画部世界遺産課
群馬県前橋市大手町1-1-1　TEL 027-226-2328
http://worldheritage.pref.gunma.jp/

群馬県公式無料アプリ
「きぬめぐり」
見どころたっぷりぐんまの絹遺産を
案内するナビアプリです。
詳細はこちら→

画像提供：富岡市（P4 錦絵、P9 東置繭所）／群馬県立図書館（P10『養蚕新論』挿絵）／藤岡市教育委員会（P13 長屋門）／下仁田町（P15 風穴から吹き出す冷気）

国際連合教育科学文化機関

富岡製糸場と絹産業遺産群
世界遺産登録年:2014年

生糸が結んだ世界との絆

富岡製糸場と絹産業遺産群

Tomioka Silk Mill and Related Sites

Tomioka Silk Mill and Related Sites

生糸が結んだ世界との絆

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質な生糸（きいと）の大量生産を実現した「技術革新」と、世界と日本との間の「技術交流」を主題とした近代の絹産業に関する遺産です。日本が開発した絹の大量生産技術は、生産量が限られ一部の特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、その生活や文化をさらに豊かなものに変えました。富岡製糸場と3つの養蚕に関わる資産（田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴）は、そのことを今に伝える証なのです。

Geography

地理

日本の養蚕地帯の中心に立地

「富岡製糸場と絹産業遺産群」が所在する群馬県は、日本列島の本州中央部に位置しています。本州中央部にはかつては養蚕地帯が広がっており、群馬県では江戸時代から養蚕・製糸・織物業が盛んでした。富岡製糸場は大量の繭の入手が可能なこの地に建設されたのです。

History of Silk Industry

絹産業の歴史

絹は紀元前の中国で生産が始まり、のちに日本やヨーロッパに伝えられました。早く産業革命が始まったヨーロッパでは19世紀に器械製糸が始まりましたが、蚕の伝染病の流行により原料不足が起きました。このころ開国した日本は器械製糸技術を輸入し、1872（明治5）年にはモデル工場として富岡製糸場が創られ、その技術は全国に広まりました。また、独自に養蚕の技術革新も起こり、原料となる繭の大量生産に成功しました。製糸も継続的な技術革新が進められた結果、日本は20世紀初めには世界一の生糸輸出国となり、高級繊維の絹をより身近な存在に変えました。さらに第二次大戦後は、生糸生産のオートメーション化にも成功、自動繰糸機は全世界に輸出されました。日本で開発された養蚕製糸技術は、今日でも世界の絹産業を支えています。

絹関連年表

年代	世界	日本	富岡製糸場と絹産業遺産群
紀元前3000年	中国で絹生産始まる		
紀元前3世紀	生糸や絹織物がローマ帝国に伝わる。		
紀元前後		中国から養蚕・製糸技術が伝わる。	
6世紀	ビザンチン帝国に養蚕・製糸技術が伝わる。		
8世紀		**後半**：繭・生糸・絹生産が、九州から東北南部にまで広がる。	
13世紀 14世紀	イタリア北部に養蚕・製糸技術が伝わる。	高級品は中国から輸入。	
15世紀	フランスに養蚕・製糸技術が伝わる。		
16世紀		南蛮貿易により生糸の輸入が拡大。	
17世紀	イタリア・フランスを中心とする養蚕・製糸地帯が形成される。	**1685年**：中国からの生糸輸入を制限。	
18世紀		**1713年**：幕府の国産生糸の奨励により、本州中央部に養蚕地帯が形成され、生糸生産が盛んになる。	
19世紀	**初頭**：フランスで蒸気式製糸工場ができる。		
	1840年代：ヨーロッパで微粒子病が蔓延し、蚕種や生糸をアジアに求めるようになる。		
		1859年：開港。日本からの生糸輸出が始まる。ヨーロッパ向けが輸出の中心。	
	1860年：中国上海に器械製糸工場ができる。		**1863年**：田島弥平旧宅建築。
		1872年：政府が近代化のモデル工場として富岡製糸場を設立。器械製糸が国内に広まる。	**1872年**：富岡製糸場建設。
		1884年：アメリカが生糸輸出先の第1位となる。	**1884年**：高山社設立。
			1891年：高山社、住居兼蚕室建設。
20世紀		**初頭**：夏や秋の養蚕の実用化。	
		1906年：一代雑種の開発。	**1905年**：荒船風穴1号風穴建設。
	1909年：日本が世界一の生糸輸出国となる。		
		1914年：一代雑種の農家への配布開始。	**1912年～**：富岡製糸場と田島家、高山社、荒船風穴が連携して、外国種や交雑種の委託飼育、その後一代雑種の蚕種製造にも取り組む。
	1920年代：アメリカで靴下用生糸の需要が急増する。	**1920年代**：自動繭乾燥機、御法川多条繰糸機の実用化。	**1924年**：富岡製糸場が御法川多条繰糸機を導入。 **1927年**：高山社廃校。
		1930年代：日本の生糸が世界市場の80%を占める。	**1935年**：荒船風穴営業停止。
		1952年：自動繰糸機の実用化に成功。	**1952年**：富岡製糸場がK8型自動繰糸機を導入。
			1960年：田島家・高山家、この頃まで養蚕。
	後半：日本からの技術移転により、中国やブラジルで生糸生産が盛んになる。	**後半**：世界に向け自動繰糸機を輸出。	**1987年**：富岡製糸場操業停止。

日本で開発された養蚕製糸技術は
今日でも世界の絹産業を支えています。

Sericulture・Silk Reeling

養蚕・製糸とは

生糸（きいと）は、桑を食べて成長する蚕（カイコガの幼虫）が作る繭を原料としています。桑を育て、蚕を飼って繭を作らせるのが「養蚕業」です。そして、この繭から生糸を作るのが「製糸業」です。数個から数十個の繭糸（けんし）を合わせて1本の生糸を作ります。この生糸をさらに加工し、染め、織ることで絹織物が作られます。

養蚕

蚕の餌の桑を育て、蚕を飼育し、つくらせた繭を出荷します。

【蚕種】
蚕の卵

【蚕】
桑を食べて育つ昆虫

【繭】
蚕が1本の糸を吐いてつくる

製糸

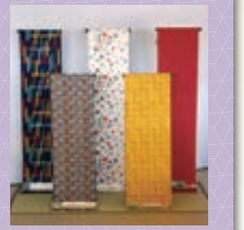
乾燥・保管した繭から生糸を製造します。

【自動繰糸機】
現在でも世界中で使われている

【生糸】
数個～数十個の繭から一本の生糸ができる

織物

生糸を染め、織り、反物などに仕上げます。



用語解説

生糸は紡がない・・・繊維の短い木綿や羊毛をより合わせて糸を作るときには「紡ぐ（つむぐ）」と言います。一方、蚕の繭は1本の長い糸でできており、その繭をほぐして生糸を作ることを「挽く（ひく）・繰る（くる）」と言います。

一代雑種・・・「糸質のよい蚕」と「糸量の多い蚕」を両親として生まれた蚕（一代雑種、F1）は、「糸質がよく糸量の多い蚕」となります。蚕の一代雑種が両親の優れた性質を受け継ぐことを証明したのは日本人科学者、外山亀太郎でした。この実用化により日本の生糸生産量は飛躍的に増加しました。

世界遺産とは？

About World Heritage

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）がつくる世界遺産リストに登載された自然・文化遺産です。国や民族を超えて共有すべき「顕著な普遍的価値」をもつ人類共通の財産です。文化遺産では価値の評価基準が(ⅰ)～(ⅵ)まで定められており、その1つ以上を満たすことが求められています。

Tomioka Silk Mill

Tajima Yahei Sericulture Farm

世界の絹産業の発展、絹の大衆化をもたらした「技術交流」と「技術革新」

Takayama-sha Sericulture School

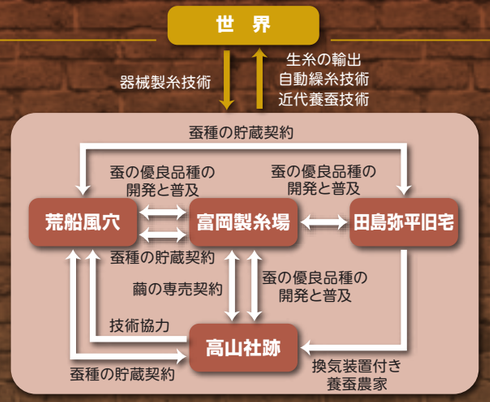
Arafune Cold Storage

世界遺産としての価値

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質生糸の大量生産を実現して絹産業の発展をもたらした、日本と他の国々との産業技術の相互交流を示す好例です。西欧から導入した器械製糸技術を発展させるとともに、養蚕業の技術革新を行い、それらの技術を今度は世界各国に広めました。

富岡製糸場・田島弥平旧宅・高山社跡・荒船風穴は、生糸生産の各過程における技術革新の主要な舞台であり、さらに教育や出版、取引などを通じて全国に大きな影響を与えました。

このことから、世界遺産に求められる顕著な普遍的価値の評価基準（ⅱ）（建築、科学技術等の発展に重要な影響を与えた、価値観の交流を示すもの）と評価基準（ⅳ）（歴史上の重要な段階を物語る建築物、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本）を満たす価値ある資産と考えられます。

相互連携により良質な繭を開発・普及

「富岡製糸場と絹産業遺産群」を構成する4資産は、それぞれが技術革新の場であるとともに、相互に連携し技術の交流を行っていました。特に富岡製糸場が良質な繭を大量に確保するために行った繭の改良運動の際は、田島家・高山社・荒船風穴が試験飼育や蚕種製造、飼育指導、蚕種貯蔵など優良品種の開発と普及に協力しました。